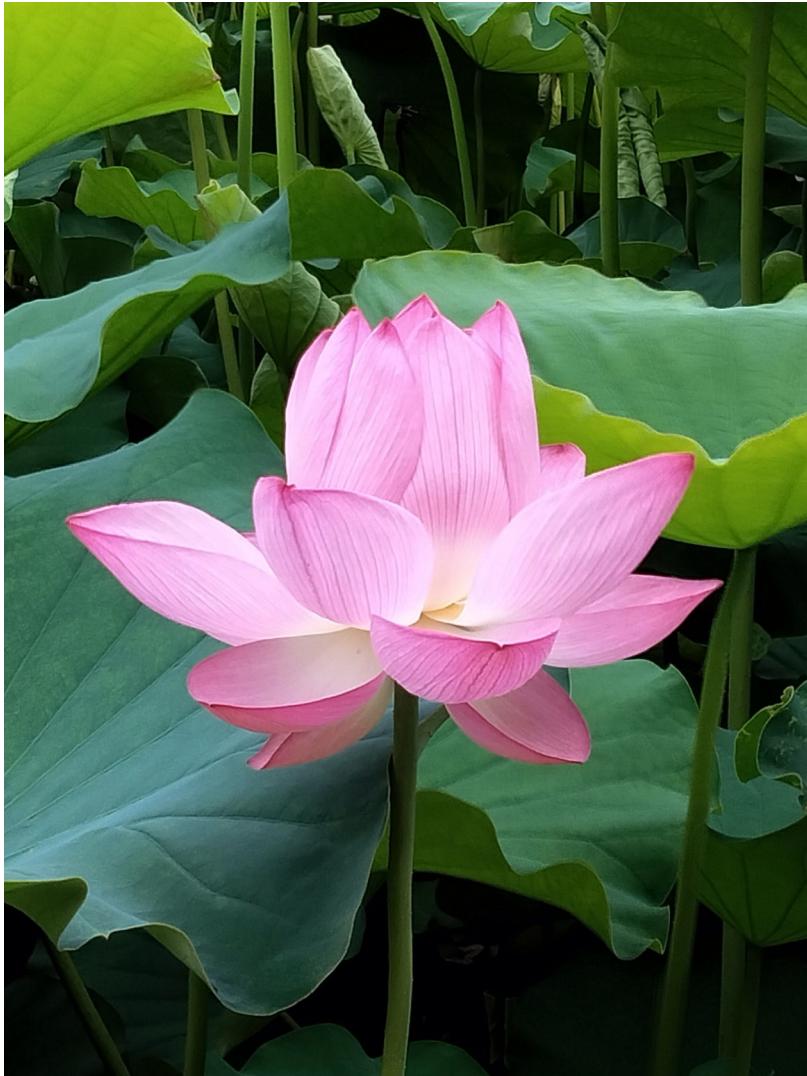


あそび

7

2025



撮影：不寝

羽拔鷄
怒れり
彼に競べられ
竹僕

曾 蝶 龜 蝋

羽拔鷄怒れり彼に競べられ

竹僕

あそ

七月集

坐・誹

佐藤 竹僊

きさらぎのあめがこゆきにこぬかあめ

花の道川沿ひの道初燕

櫻咲き泰人がくる燕くる

花の下かうもり傘の下にゐる



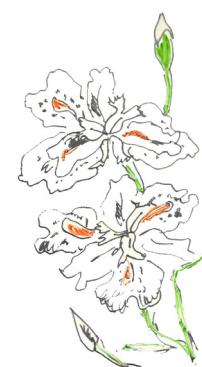
4

自轉車で他人の花見を見て通る
花いかだ鶴のみなわのゆつくりと

違ふ木が櫻竝木に立つてゐる

春の雲メロンパン屋へ手描地圖

いつのまに針子にはほづき色點す
日くだちの目高ねむれりやすむ水



5

武者人形抱へし孫や今麻雀
綿飴のごとふはと若葉かな

「碁石の日」 阜月の盛り五一四

新語知る五月の満月「フラムーン」

通知表廃止喜ぶ素足の子

ウルガアイに質素の旗の御柱

余花の雨八十年咲き妹の逝く

妹逝くや麦飯育ちの背比べ

阿木燿子真似てフレーズ夏夏来



6

けんけん乗り

篠田純子

けんけんに乗りて立ち漕ぐあを葉風

鯉のぼり一尾秋刀魚ぞ東京タワー

バスガイドの「東京だよおつかさん」風薰る

だんご虫わらわら水道栓の傍

亀虫の干乾ぶ骸ちよつと臭

轢死せしとんばの骸剥しける

まつたりと泰山木の花の午後



7

癖毛

篠田大佳

親譲りの癖毛の跳ぬる夏隣
薰風やアドレセンスは言ひ切れり
花は葉に旅する風はとどまれぬ

紋付の五月人形風にさらす
薄暑なり止まる時計へ子らのこゑ
焼け焦げし鉄に集まる鳩や朱夏

薄暑なり弱小球団背番3
球場の歓声消えて風薰る

夏もまだ夏に慣れずや夏の雨



8

雜詠

須賀敏子

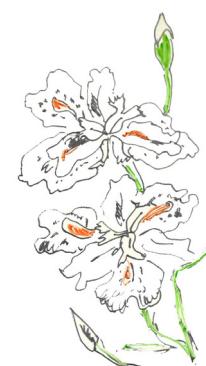
薔薇園の一花選んで写しけり

アマリリス上手に咲かす友の居て

鬼百合のブロッケ壇のこちら側

茶畑の葉を輝かす梅雨晴れ間

梅雨晴れ間低山歩く一日かな



9

みどりの日

長崎桂子

みどりの日うつそうとした道ここちよき
目のかゆみなかなか取れぬ五月空

浅蜊飯かみしめ仰ぐ夕空を
なの花や幼児は午後をかけ回る

紫と黄の一面や草の花

撫子や地区の子供の運動会

友ゆき合掌また悲し五月

たんぽぽの伸びてにんまり御満悦

混ざりけなき真赤な花やゼラニウム

白牡丹といへど仄と紅二ヶ所

夏はきぬ 〈六月号作品〉 森なほ子

海原に光揉みあふ立夏かな

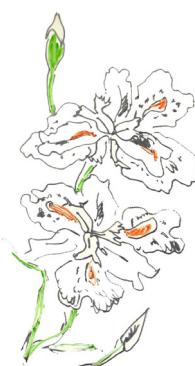
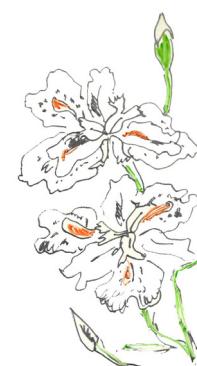
山中に売る筍の赤子ほど

熊出づの文字の薄れて夏の風

波打つて葉揺れ枝ゆれ緑の日

咲ききつて石楠花の紅薄れたり

鯉のぼり画面の中の空埋める



初夏の海を四方に記念館

熊楠の浴衣姿の眉太し

熊楠の浴衣短し古写真

古き世の写真声無し青嵐

子育ての乙鳥は人を見ておらず

野菖蒲の紫一途昨夜の雨

一斉に小槍立てたり野の菖蒲

アマリリス花と茎との九十度

青山椒

赤座典子

紫陽花やさつと一刷毛縲色

牛乳が麦茶に代る十二才

美容室のセリーヌ・ディオン夕薄暑

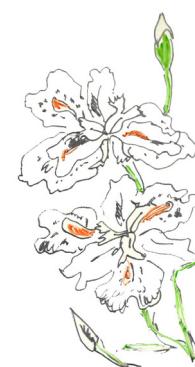
涼を呼ぶセーヴル磁器の色絵花

夏館王妃の愛でしティーセット

そうかもう貴方はいない夏つばめ

虹立つやわかり合へたる半世紀

青山椒今年多しと伝へたし



秋收集

苗育つ雨に足出し坐つて
る道の駅待つ文鳥へ冬菜選る

佐藤 竹僕

赤座典子

くるくるとちりちりと揺る花みづき

秋川 泉

ピカピカの自転車曲乗り花嵐

赤座典子

花吹雪鴨はゆるりと昼寝中

七郎衛門吉保

時移り時の首相もメーデーに

篠田純子

きらきらの稚児のかうべや灌仏会

篠田純子

ちさき手を合はすや誕生仏ひかる

七郎衛門吉保

等身大の「大鵬・王鵬」夏近し

七郎衛門吉保

老木の鞭打つ様に花開く

須賀敏子

エプロンを新しくして花衣

篠田大佳

ごみする小学生のゑみ春休み

長崎桂子

内科医様の教え心にの春

森なほ子

海原に光揉みあふ立夏かな
咲ききつて石楠花の紅薄れたり



15



五月号作品より

赤座典子・篠田大佳・佐藤喜孝

こぶし笑く四歳までは無口な子

佐藤竹僕

子どもの成長は早く、突然性格が変わるということも起ることもあることはよくわかります。五歳になつた途端に言葉が増えるというのは、想像してみると、脳が発達した、環境が変わった、仲良しの友達ができた、内省を経て明るく振る舞おうと決意したなど、いろいろ思いつきます。こぶし咲くの取り合わせに、言葉にできない子どもの内省を思います。（大佳）

送電線のたわみに春のどつかりと

佐藤竹僕

この句は、句会で、皆さんに大好評でした。あの重たげな送電線に、春が乗つかつていて、送電線が揺れているのではなく、春が、居座つている感じです。難しい言葉を使わず、その状況が、素直に詠まれている。それが、皆さんのが感を得たのでしょう。「たわみ」と「どつかり」という言葉が、しつかりと連想できました。（典子）

花冷えや禿の末は遊女とや

森なほ子

禿は、遊女に従える見習いの少女です。華やかな世界にいて、今はいとけない娘でも、将来は

遊女として過酷な環境の中に晒されるという先行きの不安を、花冷えの季語で表現しています。遊郭は、大河ドラマ「べらぼう」の舞台となつていて、当時の風俗に対する関心は高くなっています。かつての遊女たちは安らかになつたでしょうか。（大佳）

まんさくの花散らしたやうにちらし寿司

森なほ子

見立ての句は格は高くないかもしれないが、気にすることはない。楽しむのが大切。まんさくの花は花らしくない花だ。野の草花でも虫を呼ばうと目いつぱいけはひをして咲く。ところがまんさくは虫もとまどふ形をして咲く。その花弁がちらし寿司に散らしたやうに乗つてゐる。なかなか楽しく詠まれてゐる。他には何が乗つてゐるのだらう。「鮓」は夏の季語として扱ふ。ちらし寿司は好物。おはぎ・おにぎり・筍ごはんなどはプロが作るより、家庭で作りみんなでワイワイ言ひながら食べるのがいい。（喜孝）

鞆鞆やあの日あの時多過ぎる

赤座典子

ぶらんこに揺れながら、昔のことを思い出している作者です。「あの日あの時」は過去の記憶で、後悔を含んでいるように思います。ぶらんこの往復運動によつて後悔が頭にこびりついて、なかなか離れてくれないイメージを持ちます。そして、ぶらんこから降りた時に、すつきりと後悔が拭い去れるような予感もします。（大佳）

春シヨール少し明るく髪の色

赤座典子

当世老若男女を問はず黒髪を、白髪を染めて楽しんでゐる。髪型ひとつ決まらずイライラして約束の時間に間に合はぬこともある。さういへば急に思ひ出したことがある。父の葬儀を何とか終へ、だうした風の吹き回しか床屋でアイパーをかけてしまつた。なぜそのやうなことをしたのか今になつては謎である。掲句の典子さんは素直に春のよろこびに浸つてをられる。春を謳歌するに歳は関係ないが、「少し」といふくだりに作者が見えおもしろい。（喜孝）

祈れども野火煌々と山をのむ

秋川 泉

野焼きの火が延焼し、山火事になつてしまふなど、様々な原因で、世界各地に、自然発火が起つています。消火までに何日も要し、多くの人々が、避難を強いられました。幾晩も燃え続ける焰を、ニュースで見ながら、本当に祈ることしか出来ませんでした。

あらゆる分野で、何が起きるか分からぬ世に、なつてしましました。子供たちの将来が心配です。祈るばかりです。（典子）

夕闇に淡雪にぬれ野の佛

秋川 泉

夕闇に濡れた佛、そして淡雪に濡れた佛。この野佛を深く心にとどめられた。しばらく立ち止

まられたことだらう。布団に横になり目をつぶる。夜の闇の中で変らず立つてゐる野佛が見えてくる。と、読者を作者の世界にいざなふ作品。それは「夕闇に淡雪に」の一一度の「に」の効果である。高みに読者をいざなふ効果がここにはある。「仏」でなく「佛」であることにこの野佛にたいする泉さんの感情を察することができる。（喜孝）

堅雪の壁の高さや赤信号

七郎衛門吉保

『角川俳句大歳時記 春』に、「春の暖かさで、解けかかつた雪が、夜の寒さなどで、堅く凍りついた状態をいう」とある。例句として、踏みしめる雪の堅さに触れているが、作者は、高く壁となつた、堅雪を詠んでいる。雪国で見られる、壁の高さは、優に人の身長を超え、道沿いでは、人家を隠すほどである。

作者は、「赤信号」を高い位置に存在するとか、危険を知らせる働きをするとか、警告の意味で用いていると思われる。作者ならではの発想である。（典子）

桃の花一枝そろばん玉のごと

七郎衛門吉保

「見立て」とは、あるものを別のものに例へたり、置き換へて表現する手法や考へ方のことです。よく「如く俳句」ともいふ。掲句は桃の花枝を算盤に見立てた。見立てに使ふものは大方詠者の身辺にある物に例へる。掲句の「そろばん」は若者の発想の中には無いかもしねが、わたし

は何回も肯くことができる。形状が似ているといふ発見の楽しさから始まり、カシオの電卓が拡まるまでは家の中に必ず算盤は備へてゐたものだ。見立てのおもしろさの一つに「何に」見立てかといふ見立てた「事」や「物」にもあるやうだ。（喜孝）

風光る記事の見出しの七五調

七郎衛門吉保

七郎衛門吉保さんは世情の出来事を残さなければ俳句を作るといふ。失礼だが大方まづい。吉保さんはそんなことは恐れない。一本筋金が入つてゐる。その余得であらうか、力みが抜けた隙間に掲句が出来たやうだ。記事の見出し、キャッチフレーズほど右を向いて言つてゐるのか、左を向いて言つてゐるのか判然としない。ただ読んでもらうための言葉が並ぶ。それに騙されて読んでしまふ私もわたしだが。吉保さんは見出しがニュースの内容より「七五調」だと気づきおもしろがつてゐる。きっと内容も「風光る」にふさはしいニュースだとおもへる。吉保さんはいまに人を唸らせる時事俳句を詠まれることであらう。それを見逃さぬやうアンテナの掃除をしよう。（喜孝）

春深し先代の名のクローン犬

篠田純子

おそらく、ニュースを見て作った句であると思いますが、亡くなつた愛犬のクローンを作つて、同じ名前で飼育する飼い主のニュースが出てきました。春深しという季語からは、季節が巡つて、いるように思います。（大佳）

花の雨佃小橋の聲

篠田純子

季語に凭れ、地名に寄り添ひ、そして言葉を愛し一句が詠まれてゐる。ここにあるすべての言葉を愛し信じてゐる。他者の言などこの句には不要である。わたしも昔日人の案内で佃小橋に立つたことがある。今ネットで見ると佃小橋から見える空にはビルが林立してゐる。そのやうなことは掲句は目をつぶつてゐる。これは作者の意志である。（喜孝）

旅の子は漕ぐ鞆轆をめいつぱい

篠田大佳

旅先で、久しぶりにブランコを見かけ、昔とった杵柄で、思いきり漕いでみます。高い青空が近付き、戻るときの、スリリングな感覚も思い出します。その躍動感は、忘れられない思い出となることでしょう。「めいっぱい」が素敵に効いています。（典子）

墨堤にうたふ彼岸のさくらかな

篠田大佳

リハビリと称して軽運動をしに週一回迎車に乗つて出かける。一二三人が一組になつてまづ好み

の飲み物を注文していただく。同席の人は決まってゐない。先日隣り合はせた男性は私より二、三歳年上であった。手術を何度も経験なされると聞く。麻酔で寝て(?)ゐた時、不思議な夢を見たといふ。きれいな流れの小川。あしもとも澄んだ水、田んぼのやうな気がした。向ふ岸には花が咲きその向かうには懐かしい顔々がニコニコと並んでゐたといふ。家に戻つて家人にその話をしたら「それ三途の川と違ふ」といはれたと話してくれた。

掲句を読んでなぜかこの話を思ひ出してしまつた。「彼岸」といふ言葉のマジックに掛かつたのだろうか。(喜孝)

まあまあの人生なりやミモザの日

須賀敏子

物事の満足度というのは塩梅が難しく、満足しすぎると飽きてしまうし、かといって、不満が多ければ反発してしまいます。不満もあるが、楽しいこともあつたくらいが、例えば学校生活などを振り返ると、ちょうど良かつたなと思えます。

作者は人生を振り返っています。ミモザの日は三月八日を女性の日として制定されたイタリアの祝日だそうです。女性として生きるのは大変だったけど、女性に感謝する日があれば、まあまあ良かったと言えるのではないかと振り返つていてるようです。(大佳)

侘助の花の中なる目白かな

須賀敏子

蝶や昆虫は花が好きだが、鳥も負けずに花を好む。あの大型の鶲も桜の花を抓んでゐる。特にメジロやヒヨドリが目に付く。メジロといふ鳥名通り目の周りを白く縁取られてねて目立つ。そのメジロがいまは侘助の花に埋もれていそがしい。メジロにとつては極楽である。

押し出されまた潜りこむ眼白かな

吉田 輯

(喜孝)

はや開花さむさいとはぬさくら花

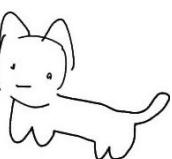
長崎桂子

奈良を訪れた作者は、早くも咲いている桜を見つけました。こんなに寒いのにもう開いている桜、咲き始めは初々しく、一段と美しいです。作者は、その美しさと逞しさに会えた、喜びから励ましを貰っています。「寒さいとはぬ」という表現に、作者は、力強さを込めています。(典子)

離し立て草餅つくる奈良の春

長崎桂子

奈良の草餅は有名で期間限定で売られると知つた。列んで買ふものらしい。中谷堂の高速餅つきは見てみると恐ろしくなる。餅つきの観衆でもある人々の声も混ざり当に奈良の春である。(喜孝)



打水のバケツに浮かぶ葉くづかな
打水や江戸の香の立つ佃島
打水の露地涉りくる銅鑼五点
打水が坂道を行く蛇になる
打水する仙台平の見えかくれ
打ち水が日課隣家の爺ありき
打水すチカチカ交信はじまれり
打ち水を子らに頼めばびしょ濡れ
置いてきし打ち水日向水の日々
水を打つバケツ小さし店の幅

渡邊友七
早崎泰江
森 理和
早崎泰江
早崎泰江
森 理和
堀内一郎
斎藤裕子
定梶じよう
竹内弘子
堀内一郎
竹内弘子
田中藤穂
篠田純子
篠田純子
田中藤穂
竹内弘子
田中藤穂
竹内弘子
竹内弘子
抽出に夫の手跡の古扇
寝ぼけても団扇は必ず左手に
いらだつてバス待つ真昼白扇子
扇子に一句師の面影をひらくべく
渡されし踊団扇を腰に差す

扇子、団扇は生活の中で活き活きとしてゐたが、
の間にやら消えていき、いまは小型の扇風機が
れてゐる。ただの扇風機とは違ひ冷たい風が出て
るさうだ。

いらだつてバス待つ真昼白扇子 芝宮須磨子

扇子に一句師の面影をひらくべく 堀内一郎

渡されし踊団扇を腰に差す 柏森定男

寝ぼけても団扇は必ず左手に 篠田大佳

抽出に夫の手跡の古扇 田中藤穂

打水のバケツに浮かぶ葉くづかな
打水や江戸の香の立つ佃島

打水の露地涉りくる銅鑼五点
打水が坂道を行く蛇になる

打水する仙台平の見えかくれ
打水すチカチカ交信はじまれり

打ち水が日課隣家の爺ありき
打ち水を子らに頼めばびしょ濡れに

置いてきし打ち水日向水の日々
水を打つバケツ小さし店の幅

篠田純子 東亞未
篠田純子 齋藤裕子

金魚への朝のあいさつ今日も又
秋めきて金魚の尾鰭ゆつたりと
エサキンと呼ばれて金魚赤かりし
深川を辰巳と呼べり金魚玉
夜の秋小鳥と金魚ひさぐ店
日向水せつせと溜める金魚のため
下駄箱の金魚玉越後獅子の唄
八階の売場へ金魚昇りゆく
大甕に夜店の金魚放ちけり
金魚玉はなれて寄つて同母妹なし
強震のありし五階の金魚玉
思ひ立つ金魚の一尾矢のごとく

早崎泰江
森 理和
後藤志づ
竹内弘子
竹内弘子
竹内弘子
竹内弘子
竹内弘子
竹内弘子
竹内弘子
竹内弘子
竹内弘子
森 理和

膝団扇うそうそ時のひとり酒
愛うたがはぬ眸「湖畔」の団扇
団扇から生まるる昔ばなしかな
添寝する団扇のはと止みにけり

房州団扇祖母の笑顔を思ひ出す
黄昏の一葦の水に団扇かな

団扇風子に送る母眼は遠く
いらだつてバス待つ真昼白扇子

何時ほど増える団扇を捨てきれず
扇子に一句師の面影をひらくべく

入り王にとんで香車や団扇風
受付に団扇の並ぶ接骨院

団扇風寝てばかりゐるおかあさん
御八つ時団扇の風を良しとして

晴れ女雨女居る丸団扇
スマホ程小さき団扇の風よろし

求めたるヴェニスの扇白レース
団扇にて曲舞の所作信長忌

佐藤恭子

長崎桂子

佐藤恭子

齊藤裕子

森理和

佐藤恭子

鎌倉喜久恵

芝宮須磨子

須賀敏子

堀内一郎

佐藤恭子

須賀敏子

須賀敏子

石森理和

石森理和

森なほ子

長崎桂子

石森理和

森なほ子

篠田純子

佐藤喜孝

赤座典子

佐藤喜孝

赤座典子

森なほ子

赤座典子

森なほ子

森なほ子

渋団扇こんな所にさしはさみ
嵩の無き垂乳根団扇にて凌ぐ
絵扇のゆるりと波紋起こしけり



定梶じよう
篠田純子
森なほ子

「夏瘦せ」といふ食欲の失せる酷暑の中でもいろいろ
いろと考へられた食べ物がある。

老恩師話題おもしろ夏料理
夏料理薬膳として白ワイン
一族の一人増えたる夏料理
夏料理はからず祝ふバースデー

田中藤穂
芝宮須磨子
田中藤穂
森山のりこ

姉に鰻断首の傷長し
どぶ川の雨鰻さらへと離す子ら
秋暑しなんと鰻の自販機ぞ

秋川 泉
篠田純子
佐藤喜孝

ベートーヴェンにコーダ冷奴におかか
魁皇が好きと言ふ母冷奴
お節介ぐせがなほらず冷奴
冷奴庭石すずろタづきぬ
頭を支ふ首疲るるよ冷奴

渡邊反七
田中藤穂
田中藤穂
堀内一郎
田中藤穂

かにかくに土用の鰻食うべけり
饒舌も土用鰻の味のうち
信心のやうに鰻を称へけり
旧木場に偲ぶ青春鰻喰ふ

遠藤 実
田中藤穂
阿部寒林
斎藤裕子
齊藤裕子

行李柳遠つ淡海の大鰻
手にとつて迷ふてをりぬ鰻の日
まだまだと神追つ払ひ鰻喰ふ

遠藤 実
秋川 泉
（佐藤喜孝）

手にとつて迷ふてをりぬ鰻の日
まだまだと神追つ払ひ鰻焼く

定梶じよう
秋川 泉
大日向幸江

大鰻さばく手元のあやふけれ
柳川に歌碑と鰻とどっこ舟

篠田純子
七郎衛門吉保
（佐藤喜孝）

あとがき

今月の表紙

東京・上野の不忍池に咲く蓮の花です。（撮影・不寛）

俳句と着物

今月は筆者の七郎衛門吉保さんが体調を崩され休稿といふことになりました。この暑さです。ご静養くださいませ。

後書きを書く

七月の十五日、このあとがきを書いてゐる。「あをやぎ通信句会」の寸感を大佳さんに送りホツとしてゐるところ。大佳さんにお手数をおかけし申し訳なく思つてゐる。台風が近づいてゐる。雨がときどき強く降る。先日の雨で日高が数匹流失してしまつた。水があふれぬやう颶風への準備をした。日高もさうだが雨と風はわたしの行動を制限する。昨日は要介護認定士が来る日。散らかし放題の一部屋を何とか坐る空間を作り疲れた。今日は用足しに出かけるつもりだつたがやめた。明日はリハビリで出かけ雨の予報。手元不如意で郵便局に行かねばとおもふが。まあ何とかなるだら

う。それにしても要介護認定のために人差し指を立てた図を見せられ何指か訊かれる。今の季節はと問はれ間違へぬやう緊張する。すこし質問の方法に一考あつてもよいともおもふ。

「前月抄」のカット、今号は手花火と西瓜。今の若者でも夏のイメージといへば老人とあまりちがはぬやうだ。縁側のある家に住んだこともないエイマなのに、縁側が描かれてゐるのがおもしろい。順調に高校生活が始まつたらしい。（喜孝）

一〇二五年七月号	発行日	七月十五日
		〒177-0042
	発行所	東京都練馬区下石神井一丁目六の三 サンハイツ石神井2 一階
電 話	090 9828 4244	
印刷・製本・レイアウト	カット／福井美佐子・ティリ エイマ	竹櫻房
会費	一五〇〇〇円（送料共）／一年	
ゆうちょ銀行（普）	（店番018）4586402	
佐藤 喜孝（サトウ ヨシタカ）		